

ライフ
ストーリー

濱元 伸彦

SOGI の多様性に関わる今までの学びと出会い
レインボー・ウィークに取り組むまで

はじめに

私は教育学部の教員で、濱元伸彦といいます。私は公立中学校の教員などを経て、現在、教育学部で教員の養成と研究に関わっています。専門は人権教育、インクルーシブ教育などです。

2024年度からは、私の働く教育学部のある聖和キャンパスにおいて、学生の実行委員のみなさんと一緒に「レインボー・ウィーク」の取り組みに関わっています。この二年間、学生たちと何度も話し合いながら、どんな企画ができるか、どんな発信ができるかを考えてきました。聖和キャンパスでは、映画の上映会やそれに基づく交流会、SOGIの多様性に関する絵本を使ったワークショップなどを進めてきました。参加者の数はまだまだ少ないですが、それでも、この取り組みには大切な意味があると私は感じています。

私自身は、こうした取り組みを通して、LGBTQ+の人々のキャンパスライフを支えるアライの一人になればと考えています。しかし、正直に言いますと、このようにレインボー・ウィークに関わりだしたからといって、例えば、学生の方から自分のセクシュアリティに関する相談を直接受けるといったことは特にありません。ただ、それでも私は、キャンパスの中で、「アライだ」と分かる人がいるということは重要ではないかと考えています。また、レインボー・ウィークの取り組みの中で、セクシュアリティの多様性について語ったり、共に学んだりする場があるということも、とても重要だと思っています。たとえレインボー・ウィークのイベントに来てくれなくても、その案内のポスターが貼られていたり、取り組みが開催されたことを知ってもらえたりするだけでも、「このキャンパスにも、SOGIのテーマを大切に考える人たちがいるんだ」と感じほっとしてくれる人がいるかもしれません。そう考えて取り組んでいます。

また、教育学部には、卒業して、学校や園の先生になる人がたくさんいます。そのようなみなさんは、教育や保育の現場で、多様なセクシュアリティの子どもたちと必ず出会うことになると思います。そのとき、セクシュアリティの多様性について学んだ経験が現場での子どもに対する支援やケアに活かされるだろうと思います。そのような先生が育っていくこ

とにも、自分なりに何か貢献したいと考えています。

大学の授業での学びから

さて、私が、SOGI の多様性や LGBTQ + の問題に、より深く向き合うようになったきっかけや出会いがいくつかあります。それらについて述べたいと思います。

一つは大学の中での授業を通してです。大学の教員である私が、大学での学びから SOGI や LGBTQ + のテーマについて学びを深めたと聞かれたら、不思議に思われるかもしれません。でも、そうして学んだ知識の影響は非常に大きいものでした。この大学で勤めて、LGBTQ + について深く学ぶきっかけとなったのは、2023 年度と 2024 年度に、人権教育運営委員として「セクシュアリティと人権」という全学の人権教育科目の授業に関わったことでした。この授業での私の役割は、さまざまなゲストスピーカーによる授業の補助を行うことでしたが、同時に、教員自身も授業内容についてふれ、学びを深めることが求められました。ゲストスピーカーには、LGBTQ + の当事者やその支援者の方、社会運動に関わる組織の人、研究者らがおりました。それらのお話は、セクシュアリティの多様性に関わる視点を広げてくれ、また、LGBTQ + の当事者が生きやすくなる環境とは何かを考えさせてくれました。非常に興味深い授業なので、ぜひみなさんも受講してほしいです。

この授業を通して、SOGI の多様性に関わる知識が広がり、「自分もこの大学のコミュニティの一員として、何かに関わっていききたい」という思いがより強くなりました。また、この授業を担当していた澤田有希子先生から、レインボー・ウィークの実行委員会に参加してみないかというお誘いがあり、私も自分が勤める聖和キャンパスで何か取り組んでみたいと考ええるようになりました。

大学院の指導教官のキャサリン・ラグ先生

上記の授業に先立ってのことですが、レインボー・ウィークなどアライとしての活動への動機づけになったこととして、私がこれまでに会って

きた二人の存在があります。以下、この二人について紹介します。

一人目は、アメリカ留学時代の大学院で指導教官だったキャサリン・ラグ先生(Catherine Lugg, Ph.D)です。私が20代の後半(二十年ほど前)、ニュージャージー州のラトガーズ大学教育学大学院の博士課程で学んでいた頃、彼女は私の研究を粘り強く支えてくれました。ラグ先生は、レズビアンとしてカミングアウトして生活し仕事をしている教授で、クィア理論に基づく教育史の批判的研究を行っていました。ラグ先生は、その研究において、アメリカの教育の歴史を批判的に検証し、学校の教育政策やカリキュラムが、性的マイノリティの存在をどのように抹消し、その声を沈黙させてきたかを、クィアの視点から歴史的に明らかにし、疑問を投げかけたのでした。

ラグ先生は、他の教員や大学院生とのやりとりも含め、性的マイノリティの教員という立場を公にして、仕事をされていました。自身の日常会話の中でも、自分やパートナーの日常生活のお話も自然とされていたのが、当時、日本でそうした会話にふれたことがなかった私にはとても印象に残りました。

ラグ先生の人となりは非常に穏やかで温かいものでした。例えば、学生が書いてきたレポートを受け取る時も、笑顔で“Thank you”と言って受け取っていました。当時の私は英語も十分に話せず、論文を書くことにも苦勞していました。それでも先生は、私の文章を丁寧に添削し、何度も励まし、私を卒業に向けてサポートしてくれました。後になって、彼女が全米の大学教員の連盟で「最も大学院生のメンタリングに優れた大学教員として表彰された(2014年)」と聞いたとき、心から納得しました。研究者である前に、一人の人として他者を支えようとするその姿勢は、今の私が学生たちに向き合うときのロールモデルになっています。

一方で、そうした温かく優しい人となりとは別に、LGBTQ+や他のマイノリティの権利擁護や差別の問題について非常に鋭敏で、教育における差別やそれを容認する制度に対して厳しく批判し、自身の研究やスピーチ、ブログ(「クィア的に考える：学校、政治、文化」)での発信などで、臆することなく発信を続けておられました。退官間近の時期には、トラン

ブ政権下のアメリカの教育政策に警鐘をならす論文を書きました。このように、ラグ先生が、マイノリティを擁護する研究者であるというスタンスを明確にもっており、一人のアライ、アクティビストとしての面をもっていました。

その時の私は、日本の中学校のカリキュラムの研究をしており、ラグ先生の研究テーマとの接点は直接的にはなかったのですが、ラグ先生の人となりや研究者としてマイノリティの問題に対して向き合う姿勢は、私の人間形成に大きな影響を与えてくれました。そのような影響を与えてくれたことに対して、心から感謝しています。

いとこのAっちの存在

もう一人、私に影響を与えた人として紹介したいのが、私のいとこであるAっちです。ちなみに以下の内容は、Aっちの許可をもらい書かせてもらいます。現在30代の彼（10年くらい年下）は、とても明るく、周囲を元気にする青年です。私の妻や娘たちとも仲がよく、いつも娘たちと遊んでくれてうれしく思っています。

A成ちは、身体的には女性として生まれましたが、成長する中で自分の性自認の違和感に気づき、自覚するようになりました。大学は女子大に入り、スポーツ選手として活躍していましたが、その大学時代に「自分は男性として生きる」と決めたのでした。もちろんそのことでいろんな葛藤はあったと思います。しかし、その女子大の中でも同じような性自認の仲間と出会い、コミュニティをもつことで、自分のアイデンティティをより明確にしていっていったといいます。

ある日、二人で歩いているとき、彼は私にそのことを打ち明けてくれました。歩きながらA成ちが私に「自分は今、男として生きてるねん」といった感じで話してくれました。いわゆるカミングアウトだったのですが、私は「へえ、そうなんだ」とぼそっと答えるくらいしかできませんでした。ただ、そう聞かされても、正直、違和感や戸惑いはあまりありませんでした。というのも、A成ちの遠い過去の記憶をさかのぼれば、確かに妹のような存在だった記憶もわずかながらあったのですが、その時には（語弊があ



るかもしれませんが)「ナイスガイ」「にいちゃん」という言葉がぴったりの存在になっていました。

A っちは、よく自分の友人たちを実家に連れてきてくれ、家族と一緒にクリスマス会や、鍋・焼き肉のパーティーを楽しみました。私の母が明るく、オープンな人間であったこともこうした場づくりに大きく影響していたと思います。

また、A っちはオシャレなので、服をどんどん買うのですが、いらなくなった古着を定期的に袋詰めして私にくれます。古着の「サブスク」を契約しているように、今も年に2回くらい服をどさっと私にくれます。靴もくれる時があり、私の生涯で初めて赤いスニーカーを履くことができました。私は、くれるものの中で自分が着たい服は使わせてもらい、一部、どうしても着にくい派手なものは古着屋に売らせてもらっています。そうしているうちに、いつしか、私のタンスはA っちの服で埋まるようになり、日常的にA っちの服ばかり着ている状態になりました。私が、大学で授業をする時の上着も、趣味の音楽（ギターの弾き語りをしています）で行うミニライブの衣装も、A っちのものを使わせてもらっています。「A っち、本当にありがとう」。いつも私の心の中で彼に対する感謝の気持ちが強くあります。

大学卒業から数年後、A っちは在学時からつきあっていった女性と結婚し、親族もみんな結婚式に参加しました。私の娘たちは、結婚式でドレスの端をもつベールガール役を務めさせてもらいました。披露宴で、友達数人とダンスを披露してくれましたが、その姿からは「おれは幸せだよ!」というメッセージしか伝わってきませんでした。この冊子の中で、このように書かせてもらうことについて打診した時も、A っちは「俺みたいに幸せなやつもいるって、ちゃんと伝えてほしいねん」と言ってくれました。

私はA っちのような、素晴らしいイトコを得られて、本当に幸せだと思い

ますし、彼のいつもポジティブであろうとする姿勢に、「私自身も私らしくあっていい」と支えられている気がします。A っちの服に袖を通してながら、いつも「ありがとう」って思っているのです。

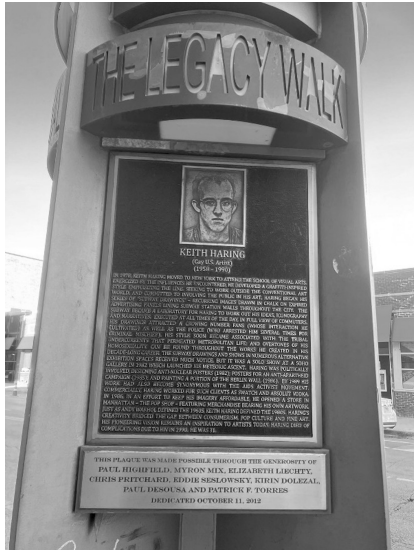
教育の大切さ：イリノイ州のシカゴを歩いて



以上のような出会いや学びを通して、レインボー・ウィークの運営にも関わらせてもらいながら、自分自身、LGBTQ+や SOGI のことをより学びたいと思うようになりました。自分が学ぶことで、自らの世界が広がり、大学内外で教員として伝えることにも反映されると思うからです。2024 年、アメリカのシカゴに学会発表で行った時には、空き時間にシカゴの町のプロジェクトである LGBTQ+ に関する屋

外公共展示「レガシー・ウォーク」を見て歩きました。この展示は、市の説明によれば「LGBT の世界史と文化への貢献を称え、人々に伝える」ことを目的としたものです。ストリートの各所に立てられた支柱にブロンズ製のレリーフと説明書きが書かれています。一本一本の支柱に、ジェイムズ・ボールドウィン（作家）、キース・ヘリング（芸術家）、フリーダ・カーロ（芸術家）、ウォルト・ホイットマン（詩人）、マーガレット・チャン（医師）など数十名の歴史上の人物の肖像と業績が彫られています。

シカゴ市が位置するイリノイ州は、また、インクルーシブ・カリキュラム法という法律を成立させました。これは、州のすべての学校の歴史教育において、アメリカ社会とその歴史における LGBTQ+ の人々の存在と貢献を正確に伝えることを義務づけ、多様性が尊重されるインクルーシブな環境をつくることを求めるものです。同様の法律をもつ州はイリノイ州以外に、全米で 6 つあるといいます。この法律のねらいについて、州のガイドラインでは次のように述べています。「インクルーシブ・カリキュラム



法は、公立学校の生徒にアメリカ社会のより正確で、完全かつ公平な姿を描き出す機会を提供し、LGBTQ+の生徒に歴史の中で自分たちの姿を見る機会を提供する。」

この法律のねらいやビジョンも重要ですが、私が特に興味をもったのは、この法律が求める LGBTQ + に関わる教育の意義についての主張でした。そのような LGBTQ + の人々を含めた歴史教育などの意義については、「すべての個人の価値と多様な社会の価値を生徒に教える」「すべての生徒の教育での成功を支え

る」「LGBTQ+ の生徒に、教育内容に自分自身が反映されていることを確認する機会をつくる」「(LGBTQ+ の生徒に対する) いじめや嫌がらせなどの発生率を低下させ、安全でポジティブな学校環境の形成を促すと説明されています。実際、この法律の根拠の一つである、全米の学校環境調査(2017)によれば、「LGBTQ+ にインクルーシブなカリキュラムを導入している」と回答した学校では「同級生は LGBTQ+ の人々を受け入れている」と回答した生徒の割合が 75.0%であったのに対し、「導入していない」と回答した学校では 39.6%でした。また、「LGBTQ+ にインクルーシブなカリキュラムを導入している」と回答した学校に通う LGBTQ+ の生徒は、学校の欠席率が低く、「高校を中退するかもしれない」と回答する率も低いということもわかりました。つまり、そうしたカリキュラムをもち教育を行う学校では、LGBTQ+ の生徒の存在が受容され、学校生活での安心・安全が守られる傾向にあるということです。こうした全米の調査結果は、SOGI の多様性や LGBTQ+ の理解において、教育が果たす役割が極めて大きいことを物語っています。

私は、現在、大阪府豊中市において「人権文化のまちづくりを進める協

議会」という行政機関の委員をしています。豊中市が7年おきに行っている市民意識調査の分析に関わっていますが、その分析結果でも、上のような教育の意義が明らかになるものがありました。一例をあげますと、市の20代～30代の市民を対象にした分析結果からは、「性的マイノリティの人権問題」を学校教育の中で「学んだ経験あり」と回答した人は、「同僚に性的マイノリティがいる職場では働きたくない」という文に対し「そう思わない」が57.1%、「どちらかといえばそう思わない」が22.4%でした。一方で、上記の回答者以外（学んでいない、覚えていないなど）ですと、それぞれ45.6%、17.8%となっており、「学んだ経験がある」人のほうが否定的回答の割合が明らかに高くなっています。また、「男性どうし、女性どうしの結婚も認めるべきだ」という文についても、「性的マイノリティの人権問題」を「学んだ経験あり」とした回答者は「そう思う」が49.0%、「どちらかといえばそう思う」が22.4%で、それ以外の回答者はそれぞれ33.3%、21.1%であり、よりそれを肯定する割合が高いことが分かります。以上の結果は、LGBTQ+の人権の問題についての教育が、LGBTQ+の人権を他の人と平等に捉え、差別をなくそうとする態度にポジティブな影響を与えていることを示すものでした。

最後に

以上のような経験から、SOGIに関する教育がさまざまなレベルでもっと取り組まれることが必要だと思います。私自身、教育学部の教員として、未来の教員になる人の育成を通して、頑張っていきたいと考えています。ここまで、私が得た学びや出会いについてふれてきましたが、それを経て、レインボー・ウィークなど取り組みをより根づかせたいと考えています。そうした取り組みにより、この大学がよりインクルーシブなコミュニティとなって、この大学に所属する全員が尊重され、安心して過ごせるように、学生のみなさんと一緒に考え、取り組んでいけたらと思っています。